

みんなと一緒に高校生になる

兵庫県 神戸市立垂水東中学校 3年

大原 佳乃（おおはら かの）

「みんなと一緒に高校生になる。」

これが私の今年の目標です。なぜ、この目標にしたかというと、私にとって高校生になることは決して簡単なことではないからです。

私は「先天性表皮水疱症」という難病と闘っています。この病気は皮膚と粘膜が弱く、少しの刺激でも傷になってしまう病気です。いつも全身に傷があり、その傷の痛みとかゆさが常にあります。また、毎日、全身の傷に薬を塗り、ガーゼを交換するのに最低でも三時間はかかります。お風呂に入ったり、傷の状態がひどかったりすると、五時間以上かかることもあります。その治療を生まれたときから毎日欠かさず、母と祖母にしてもらっています。そのために、私も家族もいつも寝不足の状態が続いています。

それでも、学校を休みたいと思ったことはありません。それは、学校が楽しいからです。授業での先生のお話や新しく習うことはどれも興味深いです。友達もみんな優しく、一緒に勉強したりおしゃべりしたりするのがとても楽しいです。どんなに眠たいときでも学校に行けば気持ちがしゃきっとします。それは、学校に行って勉強することで友達とつながれると思うからです。だから、中学校で学校生活が終わるのではなく、絶対に高校へも進学したいと願っています。

しかし、現実には厳しいものでした。これまでに何校かの高校へ見学に行きました。高校の先生方は丁寧に対応してくださいました。中学校以上に広い校舎やグラウンドに驚きました。また、特別教室も充実していて、こんな素晴らしい環境で私も勉強したいと強く思いました。しかし、電動車いすで生活する私にとって絶対に欠かせないエレベーターすらない高校も多く、選択できる学校は限られます。また、障がいのある生徒を積極的に受け入れてくれようとする学校も少ないです。「自分のことが全部一人でできること」という条件を突き付けられ、受け入れを断られた学校もあります。大学病院のリハビリに通い、工夫して自分でできることが増えるようにその先生から指導を受けていますが、どうしても一人ではできないことがあります。そこを中学校では、先生や特別支援員さん、友達が手助けしてくれています。今、充実した学校生活を送れていることに、改めて感謝の思いがこみ上げてきます。しかし、高校見学では「義務教育ではないので、中学校のようにサポートできない。」と、どの高校でも言われました。支援が全くないなかで、一人で高校生活を送れるのかとても不安です。高校進学が目の

前に迫ってきた今、私が生活している「ふつう」と健常者の「ふつう」にはとても大きな差があることを思い知らされ、今まで味わったことのない厳しい現実を突きつけられています。

それでも私は、高校へ進学し、勉強を続けたいです。障がいがあるからといって、一人で家に閉じこもって生活することは絶対に嫌です。今まで地域の幼稚園・小学校・中学校で学び、たくさんの人と出会い、たくさんの人に助けられました。そして、その手助けに応えようと自分自身も一生懸命努力してきました。その努力をここで終わりにはしたくありません。

「たくさんの友達と関わりを持ちたい。いろんな体験を積みたい。自分ができることを探したい。自分がやりたいことを見つけたい。」

高校生活に大きな期待と挑戦したいという願望を持っています。そして、それらを糧にして仕事に就き、社会とのつながりを持ち続ける未来を切り開いていきたいです。

リハビリの先生から「障害者差別解消法」という法律ができ、法律では障がい者に対し「必要かつ合理的配慮」をするように努力をしなければならぬと決められたと教えていただきました。しかし、それが実現されていると言えるでしょうか。入学試験を受けることなく、受け入れを断られました。支援はできないと言われました。誰の支援も望めないのなら、母は「毎日でも私が高校へ行く。」と言ってくれています。しかし、今でも私のために自分の時間が全く取れない母にこれ以上の負担をかけたくはありません。勉強したいという意欲があれば、障がいがあっても安心して進学できる支援を受けられる社会になってほしいです。

「あなたのような前例はないから、できない。」と、これまでいろんな場面で断られることがありました。私のような難病と闘っている中学生はほんの数人に過ぎないからでしょう。しかし、今回は前例がないからと言ってあきらめることはできません。前例がないなら、私自身が前例を作ります。「電動車いすの高校生」にみんなと一緒にになりたいです。

知的障害者の災害時の避難

愛知県 刈谷市立朝日中学校 1年

石川 叡 (いしかわ さとし)

僕の弟は、自閉症という生まれつきの知的障害を持っています。上手にしゃべることが出来ないで、時々何を伝えようとしているのか分かってあげられず、文字や得意な絵で教えてもらったりすることもあります。生まれたときから一緒に生活しているので、家の中での普段の生活は、少し精神的に不安定になったりしても、慌てることはありません。とても素直な弟だと思っています。しかし、外へ出るときは少し気を遣います。言葉ではない声が出てしまったりして、周りの人を振り向かせるようなことがあるからです。いつも僕は、急に走り出したりしないように、しっかり手をつないで歩きます。色々な物を触りたがるので、手をつないでいない方の手の動きも気にしながら気を付けて歩いています。だから、たくさんの人が集まる場所に行くのは、僕も、家族もちょっと苦手です。

最近、学校で災害への備えという勉強をしました。僕たち家族は近くの小学校が避難所になっています。もし、災害が発生したとき、自分の家族は避難所でうまく暮らせるか、実はとても心配になっています。

そこで、災害のときに自閉症の子を持つ家族はどうしているのかをインターネットで調べてみました。「自閉症・災害・避難」のキーワードを入れて検索してみると、そこにはやはり、僕が心配していたことが現実に起こっていました。

「自閉症の子どもをもつ家族の孤立」です。阪神・淡路大震災でも、新潟県中越地震でも、東日本大震災でも、最近の熊本地震でも、みんな避難所に行けていませんでした。何となく予想はしていましたが、あまりにも事例が多くてびっくりしてしまい、僕はとても悲しくなりました。

東日本大震災の時、福島県原発の近くに住んでいた重度の自閉症の子どもの家族は、近くに避難所ができたのは知っていたそうですが、子どもが環境の変化や人混みに敏感に反応し、パニックを起こすことがあるという理由で避難所に行くのは遠慮していました。救援物資は、入ることができない避難所止まりなので、自宅にある少量の食料で家族四人食いつなぎ、てんかんの発作を抑えている薬が切れることにおびえながら過ごす日々だったそうです。他にも、やはり避難所に行けず、車の中で過ごした家族や、買い物に行きたくても障害がある子を一人にして外出できなくて困った人がいたそうです。避難所の配給も、長い時間並ぶことができなくて大変だったようです。

なぜ避難所に行けなかったのかは、共通していました。「寝ている人がいるか

ら静かにする」という共同生活の「暗黙の了解」が大きな壁になっていたということでした。パニック状態になって大騒ぎする可能性もあるため「迷惑をかける」と悩んで、避難所に入れなかったのです。家族の気持ちはとてもよくわかります。僕の家族もそうするしかないのかもしれませんが、でも、それでは悲しいし、いけない気がします。

災害の経験をした家族の声が集まって、福祉避難所というものを準備しようという動きがあるようです。母に聞くと、僕の住んでいる市でも、準備はあるそうです。しかし、市内の障害者の家族の人数に対して、収容できる人数が極端に少ないので、まずは地元の避難所に行って下さいと言われていたそうです。地元の避難所に行きにくいから福祉避難所があるはずなのに、何か変な気がしました。でも、その福祉避難所は遠いし、大きな川を渡らないといけないので、車が使えなかったり、川が増水したりしたら、孤立してしまうなど困ってしまいました。

不安を解決できないかと調べたのに、どんどん不安になってしまいましたが、僕なりに解決策を考えました。それは、地元の避難所の一部に、福祉避難室みたいな部屋を作ってもらうことです。そうすれば、安心して避難できる気がします。でも、狭い避難所空間でそれを許してもらえるかは不安です。避難所では、普通の人でも不安がいっぱい、気持ちに余裕がないと思うからです。その中で自閉症の子どもの行動が、わがままではなくて、障害の特性なんだよと知ってもらうのは大変なことだと思います。

災害が起きてから僕の弟のことを理解してもらおうと思っても難しいと思います。だから、普段から弟のことを地域の人にもっと知ってもらう必要があるなと思いました。弟は別にかわいそうではないし、楽しく生きているし、僕より出来ることもたくさんあります。

これからは、自閉症という障害について、もっと周りの人に知ってもらえたらいいなと思います。そして、僕の家族は地域の人たちに障害をもつ子がいることをもっと発信していく必要があるなと思いました。少し工夫をし合えば、障害者も地域で安心して暮らしていけるのではないかなと思いました。

地球人でええやんか

滋賀県 東近江市立朝桜中学校 1年

木田 美映ミシェル (きだ みはゆみしえる)

小学校4年の帰りにいつもの通り集団で仕事のおばちゃんとすれ違くと、不意に外国籍のおばさんが、私に

「あなた何人？」

と聞いてられました。私が、日本人だと答えるとその人達がすごく笑うのでとても不思議に思い、そのことを家に帰って母に話すと

「あー、今まで話してなかったけどあんたは地球人やねん。」

と真顔で母は答えました。なんぼなんでも4年生の私にそんなテレビみたいなふざけた答えは通用せえへんと思ったけど、そう考えると皆と違うこともいくつか思い当たりました。そういえば私の名前は他の人に比べて長い。省略して記入しようとする怒られる。そしてお父さんの顔は、やたら濃いし、時々知らない言葉で電話している。なんぼなんでもだまされへんで！私の気持ちとは裏腹に母は話し続けました。

「あんたのお父さんは日系ペルー人や。お父さんのおじいちゃんはイギリス人で、そのおじいちゃんのお父さんとお母さんがイギリス人とイタリア人、お父さんのお母さん、すなわちおばあちゃんは日系ペルー人、そのお父さんが日本人、お母さんがペルーの人や。そんなお父さんと結婚したお母さんは日本人や。そやし、あんたは国籍は日本やねんけどいろんな国の血と誇りが混ざった代表でもあるんやから地球人でええやんか。」と…。なんとアバウトな…。

だいたいうちの母は大雑把というかなんとか一言では言い表せないところがあるとは小さいながら気付いてはいたけど、なんぼなんでも地球人なんて言い訳が通用するわけがない。「だからまじめに何人なん？」私は再度大声で確認すると「だいたいお父さんの国ではたいていの人色々な国の血が混じってる人ばかりやから何人何人でそんなことあんまり言わはらへんねん。だから国籍は日本やけど地球人でええやん。」小学生の私としては本当に釈然としないまま時間が過ぎました。それから時々そんな話はでましたが、ことあるごとに地球人という答えしか返ってこないの、お姉ちゃんに最近その話をすると、お姉ちゃんから私の知らないお父さんとお母さんの話が出てきました。

今でこそ私の両親は私達のスポーツの応援ばかりに追われていますが、お姉ちゃんが小さかった時はお姉ちゃんを連れて学校や公民館など色々な所に外国の生活の現状を皆に話しに行っていたようです。お父さん達日系の人が日本に働きに

来て、その時子供達が言葉もわからず、学校の先生も子供も親も皆困っていたそうです。そんな中で今の生活や文化を知ってもらおうと、お父さんおばあちゃん
で料理教室を開いたり、民族ダンスをひろうしたり、そのダンスにお姉ちゃんも
出たことがあったと話してくれました。そういえば、今も外国の民族衣装などが
家にあるし、アルバムで自分の民族衣装を着た姿の家族の新聞の切り抜きがある
ことを思い出しました。私は母にお姉ちゃんが話していたことを聞きました。す
ると、「そうやねん、お父さんはあなた達子供が生まれた時に外国の子達が色々
困ってる現状を見て、自分の子達が日本で暮らしやすい未来を作るぞって決心し
はってん。だから、1人にできることは小さいけど、今色々な人に話す機会があ
るならと、仕事が終わってから遅くまで色んな活動してはった。お父さんは『今
は種をまく時期や。自分の行動が子供が少し大きくなった時に芽を出して、大人
になった時花咲いてたらそれは大成功や、だからがんばる』て言ってはったな。」
と話してくれました。私は今の父から想像しなかった一面を聞いた気がしました。

私達が困らない世の中って？私は何に困ってる？普通に学校に行って友達も仲
良くしてくれる。市役所やお店に行っても外国の人が皆と同じように働いている。
そう考えた時初めてお父さんの目指していた当たり前や普通の暮らし、そしてお
母さんのあのふざけた「地球人でええやんか。」の意味がパズルの1ピースが入
るように自分の中にしっくり納まって意味深い言葉であることがやっと理解でき
ました。そうか！私のこの中に流れる血は色々な国の人の声・魂・叫び・想いが詰
まっているんだ。それは私だけでなく友達もそうで脈々とつながる血のリレーが
私達に受け継がれているんだということを。だからこそ精一杯生きてよい世の中
を次の未来につないでいかないといけないのだということが。

私はやっとわかりました。当たり前や普通のありがたさを。そしてそれは以前
あった人達の苦労の上にあるということも。

先生。今度私は誰かに「何人？」って聞かれたら

「地球人でええやんか。」

ちょっとお茶目なこの切りかえしを、みんなにも使ってみようかな？と思うので
す。

私が私でいるために

栃木県 栃木県立岡本特別支援学校 3年

菅野 莉子（すがの りこ）

みんなは、特別支援学校について、どんな風に考えているのだろう。

私は、病気をきっかけに、中学二年の一月に「自分の意志」で「岡本特別支援学校」に転校した。

今まで私は、病気を理由にできないことがたくさんあった。その一つが運動だ。小さい頃に体操を習っていた私は、体を動かすことが大好きだった。しかし小学五年の頃からずっと体育は見学。他にも、杖を使っているため、教室を移動しての授業も難しくなり、さらにアレルギーもたくさんあるので、調理実習や課外活動、給食さえもみんなと同じようにできなくなった。

小さい頃から病弱だったが、大きくなるにつれて悪化し、中学に入る頃には、学校さえ毎日行くことができない状態になった。そして、友達と自分との差にも悩み始め、学校生活もうまく送れず、焦りと不安が募っていった中学一年の夏。私は母にずっと抱えていた不安、焦り、生活の苦しさと共に「特別支援学校に行ってみよう。」と打ち明けた。たまたまテレビで流れていた特別支援学校のドキュメンタリーを見て、「こういう学校なら、私も輝けるかもしれない。自分の力を生かせるかもしれない。」と強く思ったからだ。

そんな私の思いに父と母も賛成してくれ、学校探しが始まったが、なかなか決まらず、中学二年に進級したときには、保健室登校になった。みんなと一緒に授業を受けられない毎日。しかし、負けず嫌いな私は必死で勉強した。けれど、正直もう無理だと思い始めていた中学二年の秋、ついに転校先が決まった。「これでやっと、きちんと学校に行ける。」と涙が出たのを覚えている。「行きたい。」と母に伝えてから一年が経っていた。

けれど、周りの人はあまり喜んでくれなかった。一人が涙を流し、三人がため息をついて反対した。「あなたの学力が下がってしまう。」「普通の学校じゃないなんて可哀想。」「そんなところ、学校じゃない。」…。次々に言われた。

特別支援学校は、そんなに悪いところなのだろうか。行かない方がよいところなのだろうか。

私は今車イスを使っているが、今まで周りの人たちは、視線を合わせて話したりはしてくれなかった。しかし、今の学校の先生は「当たり前のように」しゃがんで視線を合わせてくれる。今まで見下ろされて当たり前だった私には、こんな小さなことでも、一つ一つに優しさを感じるのだ。この学校は自然と「キラキラ

輝けるよう」，「心置きなく力を出せるよう」，先生方がサポートしてくれる，温かい環境を作ってくれるのだ。

「自分の力を生かせる」。これが，私が自ら行きたいと決めた理由だ。今までできずにいたことも，この岡本特別支援学校に来た今は全てできている。今は車イスでも体育の授業に参加している。先生が転倒防止ベルトを作ってくれ，それをして毎回思いっきり体を動かしている。アレルギーがたくさんあっても，「どうしたら実験や調理実習ができるのか。」と一緒に考え，工夫してくれている。私にとって，今の学校が大切な学びの場となっている。転校してもうすぐ半年が経つ。私はとても明るく「キラキラ」とした毎日を送っている。「転校を決めて良かった。」「ここに来られて良かった。」と心から思っている。

しかし，「どこの学校に行っているの。」と聞かれて，「特別支援学校です。」と答えると，「ごめんなさいね。」とか，「大変ね。」と言われる。どうして謝るのだろう。どうして大変なのだろう。いつも不思議に思う。確かに学校生活は大変だが，それはどこにいても同じこと。私はそのくらいに思っているのに…。誇らしくさえ思っているのに…。

私が転校してから感じた心のモヤモヤ。差別だと思えてならない言動。周りにはそういう人がたくさんいるのが現実だ。勝手に「可哀想だ。」とか「行かない方がいい。」とか決めつけないで欲しい。その場所で「自分の力をつけている子がいること」「楽しく学習している子がいること」を忘れないで欲しい。

私は，この学校に来てから夢が増えた。私ができることなんて，ちっぽけかもしれないけれど，病気を抱えながら地元の学校に行っている昔の私みたいに，モヤモヤしている子の背中を少しでも押せるように，まずは「特別支援学校の良さを伝えたい」。これも増えた夢の一つだ。

病棟の保育士さんにもなりたいし，看護師，助産師，理学療法士もいい。宇宙飛行士になって，宇宙にも行ってみたいし，車イスのモデルもかっこいい。

みんなは，特別支援学校について，どんな風に考えているのだろう。

私は今，特別支援学校で最高にキラキラしている。

髪がつなぐ思いやり

埼玉県 行田市立長野中学校 1年

関根 悠里（せきね ゆうり）

写真の中の子には、髪の色もまゆもなかった。小学三年の私には、
「何か変だな。」
という感情がわいていた。

その子は、母の知り合いの子どもで、小児がんをわずらっていた。がんの治り
ようをしており、使う薬の副作用で毛が抜けてしまっていた。幼かったとはいえ、
失礼な感情を抱いてしまったことに反省した。

人は、自分と違うだけで、偏見をもってしまいがちだ。あの時の私は、病気の
ことを知らず、人の心の痛みにも気づくことができなかった。

私の祖母は美容師だ。祖母から、「ヘアドネーション」のことを教えてもらっ
た。ヘアドネーションとは、髪を寄付することだった。何年も伸ばした髪をカット
し、その長い髪で、ウィッグを作る。それをがん治りようや、原因の分からない
脱毛症などで、髪を失ってしまった子どもたちに寄付する。

「私もやってみよう。」

その日から、私も髪を伸ばし始めた。自分の髪の色が、だれかの役に立てると
思うとうれしかった。

髪を伸ばすだけのこと。簡単なことだと思っていたが、道のりは長かった。ウ
ィッグを作るのに必要な人毛の長さが、切り口から毛先まで、三十一センチメ
ートル以上だった。髪をカットした後の自分の髪型を考えると、はえ際から四十セ
ンチメートルくらいは伸ばす必要があった。伸ばし始めてから最初の夏、髪の色
が長いために暑く、洗髪も大変で、私は、

「もうやめた。髪を切ろう。」

と、挫折してしまった。しかし、私より数倍つらい思いをして、治りように耐え
ているあの写真の子を思い出した。

病気のこと、髪を寄付のことについて、インターネットや本で調べてみた。人
毛でつくるウィッグは、約三十人分の髪で一人分のウィッグになるそうだ。私は
挫折している場合ではないと思った。

病気は辛く苦しいこと。「脱毛」による精神的苦痛は大きく、病気と同じくら
い辛いもの。髪がないことで、周りの人からジロジロ見られたり、

「気持ち悪い。」

と、心ない言葉をかけられた方もいるという現実。また、人の目が気になり、引

きこもりになってしまった方もいた。

私たちは、無意識に自分と違うものに偏見を持ってしまう。正直、私たちの心の中から、差別や偏見をなくすことは難しいことかもしれない。些細なイジメや、小さな偏見から、テロや戦争など、世界規模の争いに至るまで大きい小さいはある。けれども、それらは、どれも他を受け入れないことから起きているのではないだろうか。

一人一人、外見も性格も能力も違う。習慣や文化も十人十色であり、みな違っている。私たちは、そのことを分かっているはずなのに、時々忘れてしまったり、目をそむけてしまったりする。悲しい現実だ。

しかし、私たち一人一人の力は小さいけれど、小さいことの積み重ねで、だれもが笑って過ごしていける社会を、世界を、つくれるはずだ。

私は三年半、髪を伸ばし続けた。去年、四十センチメートルほどまで伸びた髪を、祖母にカットしてもらった。そして、その髪を寄付した。人生初のベリーショートヘアになった。あまりの短髪に、男の子みたいで恥ずかしく、人前に出るのがすごくいやだった。

次の日登校すると、髪を伸ばしていた理由を知っていた友達が、

「すごく似合ってる。髪を寄付したんだね。」

と言ってくれた。他の友達からも、先生方からも、温かい言葉をいただいた。

私はまた、髪を伸ばしている。私はヘアドネーションのことを多くの人に知ってほしい。病気で苦しむ人たちが、少しでも前向きになり、笑って過ごせる世の中になることを強く願う。そのために、ボランティア活動などに進んで参加し、助け合いや思いやりについて考えを深めていきたい。

「私のルーツ」

佐賀県 唐津市立浜玉中学校 3年

吉原 直 (よしはら なお)

私のルーツは満州にある。

私の祖父の名前は「満」という。昭和十一年に旧満州の奉天で生まれたのがその由来だそうだ。三年前に七十七歳で他界し、直接本人に戦争体験について聞いたことはないが、お祝い事があると自ら台所に立ち、水餃子を振る舞ってくれたことはよく覚えている。

私が、祖父とその家族が体験したことについて知りたいと思うようになったのは、祖父の弟が最近新聞やテレビの取材に応え、その当時の体験を耳にするようになったことがきっかけだ。戦後、旧満州や朝鮮半島などから引き揚げてきた人たち三千三百人余りの膨大な資料が、祖父と弟が働いていた商店の二階にあった佐賀県厚生会伊万里分会の事務所跡で確認されたのだ。海外での生活の実態や引き揚げてきた時の状況、その後の日本での生活ぶりなどを記した貴重な資料として研究が進められていることが紹介された。取材で祖父の弟は「書類の存在を知っているのは、自分だけになってしまった。この、引き揚げ者一人一人の物語が社会的に忘れ去られることなく、研究という形で光が当たることは嬉しい。先人たちの思いを後世に語り継いでほしい。」と語っていた。

番組を見終わった私に、父は一冊の本を手渡した。百ページほどの薄い本の表紙には、「海草の旗ーわたしの引揚げ記録ー」とあり、著者が祖父の姉であることを知った。

この本によると、祖父の家族は昭和八年に旧満州に渡ったそうだ。曾祖父は満州鉄道勤務で、お手伝いが九人もいる邸宅で裕福な暮らしをしていて、水餃子の作り方は、お手伝いの中国人から教えてもらったようだ。

しかし、敗戦をきっかけにソ連軍が進駐し、戦時中に曾祖父が親しくしていた中国人から「ここには娘さんたちがソ連軍に連れ去られてしまう。」という情報を聞き、祖父の姉二人は、当時十三歳と十歳という若さにもかかわらず、親元から離され、二人だけで日本を目指すことになったそうだ。その途中、敗戦国の日本人の命が無造作に扱われる中で、住み込みのお手伝いとして半年間面倒を見てくれた北朝鮮の家族がいたおかげで、帰国が果たせたと書いてあった。国同士が争っていても、そこに住む人々のことを偏見や差別の目で見えてはいけないという教訓ではないか。二人は朝鮮半島の半分を、空腹に耐えながら徒歩でソウルまで五十日以上歩き、奉天脱出から一年二ヶ月後に故郷伊万里に戻った。別ルート

で先に帰国した両親に再会した時に、仏壇に二人の位牌が飾ってあったことから、当時少女二人で帰国することがいかに過酷だったかが想像できる。

命からがら引き揚げてきて、家族と再会したのもつかの間、今度は貧困と偏見が待っていた。曾祖父は、平戸で仕入れたいりこやかまぼこを闇市で売り、一家の命をつないだ。国が用意した引き揚げ者専用の八畳一間の木造アパートに、運良く家族八人で住めたそうだが、入居できたのは希望者のわずか二%だけだった。そして、引き揚げ者に対する偏見は、祖父の弟も苦しめた。小学校で地区長になった時、大人から「また引き揚げ者が代表になった。」と言われ、悔しい思いをしたのだ。

祖父の姉は本のあとがきの中で「戦争は絶対に反対。二度と自分と同じ道を子どもたちに歩ませてはならない。」と記している。日本人として記録に残しておきたいという強い願いに違いない。また、祖父の弟の「引き揚げ者の歴史を後世に伝えたい」という思いも、何よりも切実に平和を願う表れではないか。

私はこれまで、長崎で原爆について、ロサンゼルスで日系アメリカ人の歴史について、知覧で特攻隊について現地の資料館で学んできた。戦争について勉強したつもりでいたが、身近な親戚のことを全く知らない自分が恥ずかしくなった。この歴史を語り継ぎ、二度と戦争を繰り返さない。北朝鮮のミサイル問題など、不安や緊張で揺らいでいる世界情勢だからこそ、平和な世界の実現のために、私たちができることをしっかり考えていきたい。

戦後七十年が過ぎ、「引き揚げ」という言葉が死語となろうとしている。この言葉を語り継ぐため、私は近い将来、引き揚げ者百四十万人が上陸した佐世保の浦頭引揚記念館を訪れたい。人々がどんな思いで帰国を果たし、歩んでいったかを知りたい。引き揚げ者を不眠不休で保護した佐世保引揚擁護局は、現在ハウステンボスに生まれ変わり、戦争の遺構はどんどん風化していくからだ。

そして、私が結婚して家族をもったら、祖父がそうしていたように、水餃子を家族に振る舞いたい。「何でうちは焼き餃子じゃなくて水餃子なの？」と子どもに聞かれたら、私のルーツについて話してみようと思う。それが平和のバトンを引き継ぐ私の使命だと思うからだ。

幸せを実現するために

三重県 大台町立大台中学校 2年

尾上 恵里佳 (おのうえ えりか)

「恵里佳、空はこんなに広いんですよ。境目なんか無い。大きくなったら、いろんな世界を見ておいで。」

祖父は、私を抱き上げると、いつもこのように語りかけていたそうだ。母方の祖父は、二〇〇六年十月三十一日、胆管癌によって他界した。私が三歳の頃である。だから、祖父との明確な思い出はほとんどない。しかし、目を閉じると、日焼けしたしわだらけの顔で嬉しそうに笑う祖父の表情がぼんやりと浮かんでくる。きっと、この表情で私に、あの言葉をかけてくれていたにちがいない。

もうひとつ浮かんでくるのは、祖父の遺体の前で涙を流していた叔父の姿である。叔父は、私の母の義弟である。日頃、あまり感情を出さない叔父が握りこぶしをつくって泣いているのを見たのが、幼い私にとって衝撃的だったのか、私の脳裏に映像のように残っている。確かに、愛する人と永遠に別れることは、身が引き裂かれそうな程、辛いものだ。自分が成長するにつれ、叔父の涙には計り知れない深い思いがあったのではないかと、それは叔父の右手に関することではないだろうかと思いつつ折々考えるようになった。中学生になり、母に進路の相談をしているとき、「自分がどう生きたいか、どう生きたら幸せか」という話になった。その時、叔父と叔母が幸せを築いてきた話を母から聞いた。全てを知った時、祖父への敬愛の気持ちと叔父や叔母の強い覚悟を私は想像した。

叔父は、二十代の頃、仕事中に取り扱っていた鉄材が右手に落ちてきたそうだ。そして、右手を失った。叔母とはその後、出会った。叔母は大学生で、アルバイトをしていた店に叔父がいた。二人は互いに惹かれ合い、結婚を考えるようになった。しかし、叔母には、不安に思うことがあった。家族は、祝福してくれるだろうか。娘の将来の姿を色々思い描く両親を見て、自分の考える幸せとの隔たりを大きく感じていたからだ。祝福してもらえなくても結婚はしたい。しかし、祝福してくれたらより嬉しい。躊躇っているうちに時間が過ぎていった。そんな時、曾祖母の余命が僅かであることが分かり、意を決して叔父は結婚の許しを得るために祖父母のもとを訪れた。自分の右手が義手であること、高校に馴染めず退学してしまったことなど、自分の生い立ちを正直に話した。祖母は受け止め切れなかったのか、話の途中で部屋を退出してしまった。最後まで頷きながら静かに話を聞いた祖父は、

「これからよろしく頼みます。家族として、何でも遠慮なく言ってください。」

と伝えたい。その声を聞いて、祖母は再び部屋に戻ってきた。そして、
「私は認めません。期待して大学で勉強させてきたのに。これでは幸せになれません。」

と言い放った。祖父は間髪入れずに、
「何も言うな。これからは、家族や。」

と返して、祖母を部屋から出した。その後、祖母方の親戚の反対も祖父が全て対応した。こんなに強い祖父の姿は、初めてだったと後になって祖母が言っていた。家庭では温厚な祖父。祖母に厳しいことを言われても、文句一つ言うことなく従う祖父。そのような祖父が、初めて祖母に毅然とした態度で気持ちを伝えた。それは、二人の幸せを願う上での行動だったに違いない。叔父が正直に自分の全てを語り、心の底から結婚を望む気持ちが祖父に伝わったのだろう。祖父は、結婚式を挙げてはどうかと言った。しかし、二人は、それを断った。祖母が受け入れてくれているようには、感じられなかったからだろう。それから一年半後、曾祖母に続くように祖父は他界した。癌の末期には強烈な痛みを感じていただろうに一言も痛い、辛いとは言わなかった。最期は、自分で救急車を呼んでほしいと頼み、病院に着くと間もなく息を引き取った。遺体として自宅に帰ってからも、叔父はずっと正座をしたまま祖父の傍にいた。三歳の私が目にしたのは、その姿だったのだ。叔父は葬儀の時左手に右手を添えて棺を担いでいた。

あれから、十一年の月日が流れた。祖父の月命日には、叔父と叔母は必ず墓前に花を供えている。子どもが生まれて家族が増え、今では四人で供えている。その花は、

「ありがとうございます。幸せです。」

と、祖父に語りかけているようである。そこには、時が経っても変わらない気持ちがある。

それとは逆に、時の経過が人の気持ちを変えることもある。孫に囲まれた祖母はとても幸せそうである。孫の顔が見たいあまり、叔父や叔母が来るのを心待ちにするようになっている。祖父が望んだ差別や偏見という境目のない世界こそ、祖母や叔父、叔母の家族を幸せにしてくれたのだと思う。空をぐっと見上げて、私は祖父に誓う。

「おじいちゃん、次は私が境目のない世界をつくるよ。強く優しい気持ちで、必要なことを必要な時に伝えられる人になるよ。」

概念を取り払って

千葉県 木更津市立木更津第一中学校 3年

金子 華音 (かねこ かのん)

「男の子はあちらの列です。」

小学校入学式の受付で、私はそう言われました。髪は短く、男の子用のスーツを着ていたので「男の子」と言われても仕方ありませんでした。私にとっては、大好きな兄のお下がりを着られることが、当時は単純に嬉しくて、そこに違和感や嫌だなという感情は全くなかったのです。ただ、実際に入学して学校生活が始まると、嫌な思いをすることがありました。普段から男の子のような服装だったため、「女子トイレから男子が出てきた！」と廊下で叫ばれたことがあります。その時、イラッとしたことを覚えています。

また、私はサッカーをやっているのですが、週に一度電車でスクールに通っていた時期がありました。駅でトイレに寄るたびに、知らないおばさんから「ぼく、ここは女子トイレだよ。男子トイレに行きなさい。」と注意をされたのです。おばさんの言う通り男子トイレに入りましたが、誰からも何も言われませんでした。小学生だった私は、次から駅では男子トイレに入ればいいのかと思いました。サッカーで大会に参加した時には、試合中に相手チームのベンチから度々「女なんかに負けるな。」という声が聞こえてきました。「負けるもんか！」と悔しい思いはしたけれど、相手の男の子が「え？女だったの？」という顔をした時や、「女？」と聞かれた時は、気づかれなくらい男らしいプレーができていたんだと嬉しくなりました。

私は男の子に間違えられることが嫌だなとは思いませんでした。自分が着たいものを着ればいい、やりたい髪型にすればいいという考えを持ってくれた、母のおかげかもしれません。家庭で否定をされなかったのも、「嫌だな。」という感情に至らなかったのだと思います。

多くの人を持っている「女らしくスカートを履きなさい」とか、「男なら強くなきゃだめだ」という固定観念は、取り払うべきです。時代が変わっていく中で、女性がバリバリ働きに出て「主婦」ではなく「主夫」が流行っている現在、だんだんと、昔ながらの性別の決まりのようなものは無くなってきています。今はまだ、常識に差がありますが、あと数十年もすれば「男のくせに」「女のくせに」そんな言葉は無くなっているかもしれません。

今、世の中には、そういった固定観念を押し付けられて嫌な思いをしている人がたくさんいます。「性同一性障害」と呼ばれる、簡単に言えば、体は女性でも

心は男性、体は男性でも心は女性という状態の人のことです。二〇一一年の厚生労働省の調査によると、日本国内の性同一性障害者は約四千人でした。しかし、その三年後、二〇一四年に北海道文教大が行った調査によると、日本国内の性同一性障害者は約四万六千人となっており、二千八百人に一人が性同一性障害者であるという計算になります。現在は更に三年が経っているので、もっと人数は増えていることでしょう。それだけ性同一性障害が認知され、世の中に受け入れられやすい環境が作られてきているということではないかと思います。今は、SNSで有名人となり、性同一性障害を知ってもらおうと活動している人もいます。日本国内だけでなく、海外の方とも、SNSを通して性同一性障害者だからこそその悩みを共有できます。技術の発展と共に、世の中の考え方や常識も目まぐるしく変わっていくのだということを、強く感じます。

私は、保育園児のとき、仮面ライダーが大好きで、プリキュアは大嫌いでした。女の子の友達がいた記憶はありませんが、男の子と丸めた紙でサッカーをしていた記憶はあります。女の子の間で流行っていた「家族ごっこ」という遊びに、ワンピースを着てくることを条件に何度か入れてもらいましたが、大体お兄ちゃん役でとてもつまらなかったのを覚えています。それは性同一性障害者と見られても、おかしくない外見や行動でした。もし、そこで、無理に「女の子らしくしなさい。」と強制をされていたら、「男の子になる。」と言って、今、制服のスカートを着用することを拒んでいたかもしれません。だから、良い意味で、自由に好きなことをさせてくれた周りの人には感謝しています。そんな私も、学年があがるにつれて、女子力を上げて魅力ある素敵な女性になりたいと思うようになりました。ありのままの自分を受け入れてくれている今の学校、友達、家族に精一杯の感謝を表現して恩返ししていきたいです。

性同一性障害のことに限らず、生き方や考え方は一人一人違うと思います。それぞれの個性を受け入れて、その上で自分の世界を広げることができたら、もっと良い世の中になるはずです。「常識」という概念を取り払って、広い視野で人と接してみたら、新しい発見があるかもしれません。私は、相手の気持ちを考えた言動、行動を心がけ、より多くの人々の個性を感じていきたいです。

誰にも同じ生きる価値

神奈川県 海老名市立海老名中学校 3年

吉井 遥香 (よしい はるか)

一年前の七月に、相模原で多くの障がい者の命が奪われた恐ろしい事件が起きました。この事件の犯人は、「障がい者は、生きていく価値がない、親がかわいそうだから安楽死させるべき」という考えのもと、犯行に至りました。

私には、見た目には分かりにくいけれど、知的障害のある妹がいます。あまり多くの言葉を持たない妹だけど、嬉しい時には笑い、悲しい時には涙を流し、くやしい時には怒る、私にとってはごく普通の十二才の女の子です。もし私の妹が、障がいがあるから死んだ方がいい、と言って殺されたら、私たち家族は、悲しみのどん底に落とされ、犯人を一生許せないでしょう。

私と妹の生きる価値に違いはあるのでしょうか？以前、妹が通っていた療育センターの園長先生は、自閉症の人たちについてのお話の中で、「人それぞれ血液型が違うように、脳のタイプが違うだけ」と仰っていました。血液型はみんな違います。性格だって全く同じという人はいないでしょう。たったその程度の違いなのに、生きる価値に違いなんてあるはずがありません。たまたま私は健常者として生まれ、妹はたまたま障がい者として生まれて来ただけです。もしかしたら私が障がい者として生まれて来ていたかもしれせん。

社会の中には、犯人と同じように、「生産性のない障がい者はいらぬ。」と言う人も多く出てきました。ネット上で匿名で犯人に同調する人が多く出てきて、驚きました。たしかに障がい者はお金を生み出せないかもしれませんが、でも、何事にも一生懸命に取り組む姿を見て、私はいつも勇気をもらいます。頑張ろうと思います。私は障がい者に生きる価値がないと言う人たちに言いたい事です。もしも自分の子供が障がいを持って生まれて来たら、もしも自分の身内がある日突然、事故や病気で障がい者になってしまったら、今と同じ事が言えますか？と。

事件の後、障がい者の人たちはどのような気持ちで生活しているのでしょうか。町を歩いている時、電車に乗っている時、自分の周りにはいる大勢の人たちの中にも、自分の事を「死んでしまえばいいのに」と思っている人がいるかもしれないと思ったら、大変な恐怖なのではないでしょうか。

多くの健常者にとっては、障がい者の人は遠い存在だと思います。私も妹がいなかったら、一生関わりを持たなかったかもしれません。最近では、グループホームという形で地域の中で暮らす障がい者の人たちも増えてきました。でもまだまだ地域の住民に受け入れられないという現実もあります。昔、障害者施設を建

てる時、地域の人々が障がい者に会う際には妊婦さんはお腹に鏡を付けて会ったそうです。生まれて来る子供に障害が移らないようにそうしたそうです。今はそこまでの事はないけれど、よく理解されていない点はたいして変わっていないのかもしれない。

もったもった、健常者と障がい者の交流が深まれば良いと思います。例えば子供の頃から学校などで障がいを持った友達と遊ぶ機会が全員にあれば、今回の事件の時だってその子の顔を思い出し、他人事とは思わなかっただろうし、犯人に同調なんかしないで、被害にあった人たちや、そのご家族の悲しみに寄り添えたのではないのでしょうか。

相模原事件の犯人は、「家族がかわいそうだ」と言いました。確かに普通の子育てより何倍も大変な子育てだろうと思います。私の母も明るくしていますが、妹が小さい頃は、妹の将来に不安を感じてよく泣いていたそうです。今でも、自分たちが死んだ後のことは、いつだって心配だと言います。だからと言って、妹が死んでしまったら楽になるのでしょうか？まったく違います。悲しみに暮れ、生きる望みを失くすと思います。妹は、家族の癒しであり、世界でたった一人の大切な存在だからです。母は、妹が小さい時から近所の人たちに妹の事を打ち明けてきました。妹を理解してもらい、一人で困っていたら助けてもらえるようにと考えたからです。この世の中は、障がい者にとってはまだまだ生きにくく、妹の人生は私の人生よりもずっとハードな障害物競走のようなものになるだろうと思います。妹は時々、思い出したかのように「お姉ちゃん、大人になったら、一緒に暮らしてくれる？」と聞いてきます。小学生なのに、自分の将来に不安を感じているのです。

私には、この事件を通してより一層強くなった願いがあります。妹のような障がいを持った人たちが、希望を持って自分の人生を歩いていけますように。私の両親のような、障がいを持った人を育てている人たちが、安心して我が子より先に旅立てますように。そして、私のような人たちが父母亡き後も、障がいのある兄弟を支えていけますように。

自分にできること

三重県 志摩市立大王中学校 2年

竹村 真那 (たけむら まな)

「おなごはやぐらへ上がるもんじゃない。」
これは、私に向けて発せられた言葉です。

毎年、夏になると盆踊りがあります。私は小さい時から祖父母が住む地区の盆踊りに行っていました。そこでは、私の父や兄、従兄弟たちが太鼓や音頭を取っています。私もやってみたくて、やぐらに上がってみたいと思っていました。従兄弟や兄が太鼓をたたけるようになった年、私も一緒に上がらせてもらえました。太鼓はたたけなかったけれど、音頭がとりやすいように「はやし」を大きな声で言っていました。子どもたちの出番が終わりやぐらから降りた時、あるおばあさんが、私の所へやってきて、冒頭の言葉を言いました。「おなごはやぐらへ上がるもんじゃない。」私はその時、小さかったけれど、小さかった私にもわかるくらいきつい言葉でした。盆踊りが大好きで「はやし」も大きな声で頑張っていたのに、そんなことを言われるとは思いませんでした。悲しいやら、びっくりやらで泣いてしまいました。その時は、何も考えられなかったけど、その後「何で、男の子は上がってもいいのに女の子はいけないの?」「男の子と女の子と何が違うの?」と頭の中をぐるぐると回り続ける疑問に苦しみました。それから、夏がくるたびに、盆踊りへ行くたびに、そのことを思い出し苦しかったです。少し大きくなって、父に「音頭か太鼓かどっちかやる?」と聞かれたけどやりませんでした。やる気も起きませんでした。女の私がやってもいいのか、また何か言われるんじゃないか、という恐怖があったからです。あのおばあさんに言われた一言はたった一言だったけど私にはすごく重い一言になっていたのです。

しかし、去年の中学一年生の盆。私はそのやぐらで太鼓を叩きました。私がないぜ、前向きになれたのか。一番は、そのことを知った地区の人たちの「そんな事言われたんか。今度そんなこと言ったら、言ったるで、やりたかったらやればいい。」という力強い言葉でした。時間はかかったけれど、「女だからやれない。」という考えは「おかしい。」と、こんなにもたくさんの方が言ってくれた事に、勇気づけられたのだと思います。そして、盆踊りの太鼓デビューを果たせました。やっぱり初めは緊張したけど、だんだん太鼓の音が心地よくなりました。でも、やぐらから降りる時「何か言われるんじゃないか。」と心配しながら降りました。何も言われませんでした。「女でも、太鼓をたたいてもいい。」そう受け取りました。

そして今年、中学二年生の盆。今度は、音頭とりに挑戦しました。やぐらに上

ったとき周りからどよめきが起こりました。やはり、「女が音頭をとる」ということは、かなり異例のことなのだと感じました。さらに、音頭のマイクを持った時に、自治会長さんから名前と年を聞かれました。兄が音頭とりデビューの時には、なかったことだったのでおどろきましたが、名前と年をきかれるということは、「地区のみなさんに紹介され、歓迎されている。」ということだと思って少し安心しました。そして、音頭の出番が終わって、やぐらから降りた時に、あるおじさんに「女の人音頭とつとるの初めて見た。」と言われてほめてもらいました。昔、女の人音頭をとっていたこともあったそうだけど、知らない人がたくさんいるそうです。なので、私がやぐらに立ち、短い間だったけど音頭をとったということは、意味のあることだったのだと思います。

「おなごはやぐらに上がるもんじゃない。」その人にとっては、昔からの習慣・伝統を私に親切に教えてくれた、何でもない一言だったかもしれませんが、でも、そんな何気ない一言でも「男だから、女だから、できる事とできない事がある。」という考え方では、納得できず、傷つく人がいるということはこのことから学びました。

私は、言われてから立ち直るまでにすごい時間がかかりました。でも、今では「男だから女だから、できることがある、できないことがある。」という考えは関係ないと思うことができるようになりました。そう決めつけているのは自分の心一つです。その考え方からみんなが抜け出せたなら、色々な場所でこのような苦しみは生まれません。私の他にも同じようなことになった人がいるかもしれません。でも、昔とは違います。「いい昔」は引き継げばいいと思います。「悪い昔」には、みんなで「違うね」と言えるこれからであって欲しいと思います。私はあきらめなければ変えていけることもあるのだと思うから、これからも太鼓や音頭とりを続けていきたいです。

「同じ空の下で」

宮崎県 宮崎第一中学校 2年
仲本 愛 (なかもと かなさ)

君も見ているだろうか、この、青い空を。君も感じているだろうか、この夏色の風を。私は、この夏、貴重な体験をすることができた。それは、「決まったよ。」という担任の先生の一言から始まったのだ。外から自分の住む日本を見てみたい。自分の中の何かが変わるかもしれないという安易な思いだけで、県の事業である「アンニョンハセヨ、少年少女国際交流事業」に申し込んでみたのだ。その決定通知を目の前にして、正直心がゆれ始めていた。なぜなら、軽い気持ちで、参加申し込みをしたものの、実は、韓国という国にあまり良いイメージを抱いていなかったからだ。ニュースで見た韓国のデモの様子は激しく、恐いとさえ思っていたのだ。そんな私の気持ちとは反対に、書類の提出、説明会と韓国行きが具体化していった。「大丈夫かな、やっぱりやめようかな。」という私の心の声に気づいたかのように、父が「自分の目で見るとは大事、知らないことほど怖いものはない。」と言って背中を押してくれたのだ。

初めて見る外国の景色。降り立ったインチョン国際空港では、たくさんの外国人が行き交い、聞こえてくる言葉も英語、韓国語はもちろん、フランス語やタガログ語など、まるで地球儀の真ん中に立ち、ぐるぐると回っているかのように、世界を体じゅうで感じるすることができた。初めて食べた韓国での料理。日本とは、全く違う味に少しとまどいながらも、韓国の習慣を聞きながら味わうことができた。そして、さらに私は、韓国と北朝鮮の国境を見ることもできた。広大な土地が広がるなかフェンスとフェンスで分断された土地、いや土地だけではない。分断された家族もいることを知り、胸が見えない何かでしめつけられたようになり、苦しくなってしまった。ニュースや新聞では知り得なかった事実を目の当りにし、私の中の何かが変わろうとしていた。

韓国滞在四日目からは、いよいよホームステイ。私は、翻訳機はできるだけ使わず自分の持つ表現力でとにかく伝えてみようとして心に決めていた。そんな私の思いに応えるかのようにホームステイ先の家族も身振り手振りで伝えてくださった。私は自然と家族の一員として溶け込むことができたのだ。国立中央博物館や戦争記念館にも連れていってもらった。今まで、知らなかった、いや知ろうとしなかった韓国と日本の歴史がそこにあった。日本から見る韓国、韓国から見る日本。互いに立場は違っても人を愛する気持ちに変わりはないこと、記念館の方が語って下さった。私は今まで、自分がどれだけ狭い視野で物事を見てきたかをあらた

めて感じる時間だった。その日の夜、もう一つ出来事があった。ホームステイ先の私と同じ年の女の子と話をしていた時のことだ。突然、深刻な顔をして、私に言ったのだ。「日本に対して、私は嫌悪感を持っていた。でも、今回この国際交流に参加して、愛に出会って、そんな思いはまちがいだと気付いた。今まで、ごめんなさい。」と。私は、返す言葉がなかった。なぜなら、私自身も同じ思いを持って、韓国に来ていたからだ。そのことを、見透かされたように思えたのだ。さらに、彼女は、自分の思いを素直に打ち明け、私に何もしていないのに、謝ることもしてくれていたのだ。そんな彼女の姿は、すがすがしく立派で、私はただただ彼女の顔を見つめてうなずくことしかできなかった。

私は、ベッドの中で考えた。私にとって、今まで偏見・差別は関わりのないものだと思っていた。しかし、それは間違いだということを知り、彼女から教えられたのだ。自分の思いだけで判断し、近寄ろうともしない、知ろうともしない、そのことが、私自身が最もいやだと思っている、「偏見や差別」につながっていることに今さらながら気づいたのだ。私の心の中にも、いとも簡単に住みついてしまっていた韓国に対する偏見に気付いた時、そんな自分に対しての怒りよりも、恐ろしさを感じてしまった。「偏見や差別」は、特別な感情ではなく、無知や無理解と常に隣合わせにあるものだと思う。出発前に父が言った「知らないことほど怖いものはない」という言葉が、彼女の「今までごめんなさい。」という言葉が重なり、ぐるぐると頭の中を駆け巡っていた。

韓国に行く前と今とでは、見上げる空の色が違って見える。その空を見上げる時、私を大きく変えてくれた韓国の友達のことを思うようになったからだ。言葉、文化、肌の色が違っても同じものに感動し、家族を愛し、友を大切に思う。そんな心は遠くにいてもつながっているのだ。そんな思いに直接触れ、知ることができた十四歳の夏を私は決して忘れることはないだろう。そして、これからもこの空を見上げるたびに、「知ること」の大切さを心に刻みながら、明日への扉を開いていこうと私は思う。